第６３回大阪知的障がい者福祉大会（堺大会）に参加して

理事長　長谷川　美智代

９月２５日に開催された、第６３回大阪知的障がい者福祉大会（堺大会）に参加しました。今回は、「いろいろなつながり」をテーマに、午前の部は、会員の親御さんが、「つながるしゃべり場・１６人のパネルトーク」と題し、オンラインで、子どものこと、困りごと、将来のこと等々、ざっくばらんな雰囲気でやり取りされる様子が、映像で流されました。コロナ禍の交流の場として、また、これからの時代に即した交流の手段として、とても有効だと思いました。午後からは、「いざというときのつながり」という題目で、防災についてのお話がありました。その中で、コーディネーターの住田功一氏が紹介された作文が、強く心に残りましたので、会員の皆様にもご紹介させていただきたいと思います。

この作文は、法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会主催の「第３７回全国中学生人権作文コンテスト」で、法務大臣賞を受賞された中学１年生の石川叡さんの作文です。

「知的障害者の災害時の避難」

愛知県 刈谷市立朝日中学校　１年
石川 叡（いしかわ さとし）

僕の弟は、自閉症という生まれつきの知的障害を持っています。上手にしゃべることが出来ないので、時々何を伝えようとしているのか分かってあげられず、文字や得意な絵で教えてもらったりすることもあります。生まれたときから一緒に生活しているので、家の中での普段の生活は、少し精神的に不安定になったりしても、慌てることはありません。とても素直な弟だと思っています。しかし、外へ出るときは少し気を遣います。言葉ではない声が出てしまったりして、周りの人を振り向かせるようなことがあるからです。いつも僕は、急に走り出したりしないように、しっかり手をつないで歩きます。色々な物を触りたがるので、手をつないでいない方の手の動きも気にしながら気を付けて歩いています。だから、たくさんの人が集まる場所に行くのは、僕も、家族もちょっと苦手です。

最近、学校で災害への備えという勉強をしました。僕たち家族は近くの小学校が避難所になっています。もし、災害が発生したとき、自分の家族は避難所でうまく暮らせるか、実はとても心配になっています。

そこで、災害のときに自閉症の子を持つ家族はどうしているのかをインターネットで調べてみました。「自閉症・災害・避難」のキーワードを入れて検索してみると、そこにはやはり、僕が心配していたことが現実に起こっていました。「自閉症の子どもをもつ家族の孤立」です。阪神・淡路大震災でも、新潟県中越地震でも、東日本大震災でも、最近の熊本地震でも、みんな避難所に行けていませんでした。何となく予想はしていましたが、あまりにも事例が多くてびっくりしてしまい、僕はとても悲しくなりました。

東日本大震災の時、福島県の原発の近くに住んでいた重度の自閉症の子どもの家族は、近くに避難所ができたのは知っていたそうですが、子どもが環境の変化や人混みに敏感に反応し、パニックを起こすことがあるという理由で避難所に行くのは遠慮していました。救援物資は、入ることができない避難所止まりなので、自宅にある少量の食料で家族四人食いつなぎ、てんかんの発作を抑えている薬が切れることにおびえながら過ごす日々だったそうです。他にも、やはり避難所に行けず、車の中で過ごした家族や、買い物に行きたくても障害がある子を一人にして外出できなくて困った人がいたそうです。避難所の配給も、長い時間並ぶことができなくて大変だったようです。

なぜ避難所に行けなかったのかは、共通していました。「寝ている人がいるから静かにする」という共同生活の「暗黙の了解」が大きな壁になっていたということでした。パニック状態になって大騒ぎする可能性もあるため「迷惑をかける」と悩んで、避難所に入れなかったのです。家族の気持ちはとてもよくわかります。僕の家族もそうするしかないのかもしれません。でも、それでは悲しいし、いけない気がします。

災害の経験をした家族の声が集まって、福祉避難所というものを準備しようという動きがあるようです。母に聞くと、僕の住んでいる市でも、準備はあるそうです。しかし、市内の障害者の家族の人数に対して、収容できる人数が極端に少ないので、まずは地元の避難所に行って下さいと言われているそうです。地元の避難所に行きにくいから福祉避難所があるはずなのに、何か変な気がしました。でも、その福祉避難所は遠いし、大きな川を渡らないといけないので、車が使えなかったり、川が増水したりしたら、孤立してしまうなと困ってしまいました。

不安を解決できないかと調べたのに、どんどん不安になってしまいましたが、僕なりに解決策を考えました。それは、地元の避難所の一部に、福祉避難室みた